

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十一):『抜隊法語』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	三田國文 No.55 (2012. 6) ,p.65- 71
JaLC DOI	10.14991/002.20120600-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20120600-0065">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20120600-0065</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十一)

## 『抜隊法語』翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『抜隊法語』を紹介する。これまで述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。

江戸時代には、『二十三問答』や『大燈国師法語』、『一休骸骨』など、禅宗の思想を平易に説いた仮名法語が数多く出版されるが、いずれも主に在俗の信者、とくに子女、童蒙のための仏教入門書としての性格付けがなされている。これまでも本誌で紹介してきたように「道書類」にはそれら禅宗仮名法語が多く含まれており、その享受層を推測させるものがある。

本書もそうした禅宗仮名法語のひとつであるが、外題に「はつすいのほうこ」とあるものの、抜隊得勝(一二二七—一七八七)の『抜隊仮名法語』だけでなく、夢窓疎石(一二七五—一三五五)の仮名法語、および「由良長老法語」として法燈円明国師無本覚心(一二〇七—一九八)の法語が付せられており、道心や

座禅についての教えを中心に、三種の禅宗仮名法語を合わせて書写したものである。

まず冒頭の抜隊の法語については、『抜隊仮名法語』のうち「神童寺尼長老」に宛てたとする法語、および「中村安芸守月窓聖光」に示したとする法語の一部を抄出している。先に紹介した、大燈国師すなわち宗峰妙超が萩原(花園)天皇の皇后に説示したとされる法語のみを抄出した『大燈国師法語』と同様、女性に向けた法語という道書類の特徴を表すものといえよう。

続く夢窓の仮名法語については、冒頭に母の求めによる旨(8オ)が記される点や、仏国国師の道歌「立ぬまと引ぬ弓にてはなつ矢のあたられてしかもはつれさりけり」(8ウ)など、『夢窓仮名法語』と共通する箇所も認められるが、広く流布した版本の内容とは異なるものである。わずかに二分の法語のうち、その大半を道歌(計十九首)が占めている。なお、以前紹介した道書類の『二十三問答』末尾にも、母の求めに応じて夢窓が記したとする別の仮名法語が書写されているが、そこに付された夢窓の三首の道歌のうち二首が、本書の道歌「おもへと

もかなはぬことはねかはれてそむくにやすき世をはいとはす」(8才、第三首)、「まかすればおもひもたえぬ心かなおさへて世をはすつへかりつる」(8ウ、第四首)との類似をみせる<sup>(3)</sup>。あるいは、同系統の夢窓の仮名法語から抄出したものかと推察される。

最後の「由良長老法語」については、無本覚心の『法燈国師法語』の主張するところと大意においては共通するものの、原拠とは言えず、新出のものかと推察される。「由良長老」の表記や、末尾に付された二首の道歌などは、現存の『法燈国師法語』には見えず、特徴的である。

これら禅宗の仮名法語については、江戸開版以前にいくつか合写されて伝来した例も紹介されており、開版以前にどのような書写過程を経っていたのか、考察する上でも有益な書物といえるだろう。書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト―七二一カ
  - ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
  - ・ 寸法 縦二九・一糎。横二四・二糎。
  - ・ 表紙 本文共紙。楮紙。左肩に「はつすいのほうこ」と打付墨書。
  - ・ 丁数 墨付き十一丁。
  - ・ 本文 半葉十二行。漢字平仮名交じり。字高約二二・二糎。
  - ・ 奥書 なし。
  - ・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。
- 翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を

打つなど、読解の便宜をはかった。

#### 注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、「三田國文」連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」(『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年)、拙稿「説法・法談のラコ絵―幻中草打画』の諸本」(『仏と女の室町―物語草子論』笠間書院 二〇〇八年)、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―恋塚物語』をめぐって―」(徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年)を参照されたい。
- (2) 早苗憲生氏「蓬左文庫本『聖』假名法語』の研究(一) 本文編」(『禅文化研究所紀要』六、一九七四年五月)参照。
- (3) 『禅門法語集』上巻 復刻版(ベリかん社)参照。
- (4) 拙稿「陽明文庫蔵「道書類」の紹介(七)『大灯國師法語』翻刻・略解題」(『三田國文』五一、二〇一〇年)。
- (5) 拙稿「陽明文庫蔵「道書類」の紹介(六)『二十三問答』翻刻・略解題」(『三田國文』五〇、二〇〇九年)。
- (6) 椎名宏雄氏「六地藏寺所蔵『無名冊子』について」(『宗学研究』一四、一九七二)、早苗憲生氏「今津文庫所蔵『由良開山法燈円明國師法語』」(『禅学研究』六二、一九八三年)など参照。

#### 【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金 若手研究(B) (課題番号二二七二〇〇九〇)による研究成果の一部である。

【翻刻】

はつすいのほうこ

成仏のそみあらん人は、まつほとけになるへきぬ

しをしるへし。このぬしをしらむとおもは、たゝいま

一ねんのしたについて尋ぬへし。一さいのせんを思ひ、あく

をおもひ、色を見、きくをきくもの、これ何ものそとみ

つからふかくうたかは、かならずさとるなり。覚はずな

はちほとけ也。仏のさとるさとりは、一さいのしゆしやう

の一心也。心たいもとより淨して、一さいのきやうかひにそむ

ことなし。女人の身にある時も、女人のそうにあらず。男の

身にある時も、男のかたちにあらず。いやしき身にある時も

いやしき色もなし。貴身にある時もたつとき色もな

し。たとへはこくうのかはる色なきかことし。天地はやふるゝ

時ありとも、こくうはやふるゝ事あるへからず。こくうはたゝ

なのみありて、さらにかたちのこるへきやうなしといへとも、

十方世かいの内にして、あまねからすといふことなし。一心も

又かくのことし。しきしんの生るゝ時も一しんはひまるゝことなし。

身は死すといへともこの一心はしすることなし。又かたちの見る

へきなしといへともつうしむにみちくゝて、めに色をみるも、みゝ

にこゑをきくも、はなにかをかくも、くちに物をいふも、手

うこかし、あしをうこかすも、皆一人のゆへにあらずといふこと

なし。この心をはなれて、外にむかひて仏をもとめ法をもと

むるを、迷の衆生と名つけ、このしむは仏なり。さとる人を仏

と名つけたり。此ゆへに、自心をさとらずして成仏したる

衆生なし。このしむは六道の衆生におのゝくそくして、ひ

「(表紙)

とりももるゝ事なし。なをしこくうのよろつところ

みちみてるかことし。へたであることなし。仏にしや別なし

とはこのいはれ也。せよ仏の一しむを覚て衆生に是をしめせ共、

衆生はくちとこむにして、うさうにふかくちやくして、この無ゐ

のほつしむしやうゝの心仏をしむしえさるゆへに、たとへをも

つてとくとき、あるときはこの心をよいほうしゆとなつて、あ

る時は是を仏しやうと名つけ、ある時は大たうとなつて、或

は阿みたとなつて、あるいは大つうちせうふつとなつて、ある時は

地藏となつて、或は觀音となつて、或はふつほざつとなつて、ほ

うたうとなつて、あるいはふもみしやういせむのほんらいめんもく

となつて、六道のしゆしやうのためには六こんのぬしたるかゆへ

に地藏は六道のうけなりといへとも一切のふつほざつの名は皆

一しむのいみやうなるかゆへに自我心の仏をしんすれば一さいのせ

よ仏をしむするにあたる也。此ゆへに経にいはいはく、皆三かいたゝ

一心也。こゝろのほかに別に仏なし。心仏をよひ衆生是三はしや

へつなし。又一さいの経は衆生のしむしやうをさしたることは

なり。かるかゆへに、自一心を見る人は一さいの経を一時によむに

あたる也。此ゆへにきやうをいはいはく、しゆたらのけうは月をさすゆ

ひのことし。しゆたらの僧とは一切経也。月をさすとは衆生の

一心をさすといへり。一心をもつてないけをてらしてあきら

かなるを、月のせかいをてらすにたとへたり。此ゆへに経をよめ

ははくたいのくどくありといふも、たゝ此いはれをしらせんた

かためなり。又仏をくいやうすれば成仏すと云は、こゝろをさ

とるを云なり。仏の名をとなへ、経をならひうかむるも、たゝ

さとのきしにつかむための舟いかた也。ふねいかにのりて

「(1オ)

「(2オ)

「(2ウ)

海河をこえてきしにつきて後は、なをいそくへし。此ゆへに千日目経をよみたよりも、一座この偈をきゝたらんくとかかりなきまさりなるへし。又千年万年このこ

とはりをきゝたらんよりも、一念自心を見たらんは、かきりなきまさりなるへし。たゝしあさきより深にいるかゆへに、いふはかりなきくちはかいかいの物は、経の一字をもよみ、仏の名をもとなえんははしと舟いかたにのらむとする物のことし。ありかたきけちえんなり。もしたゝいかたの内に

急でさとり、きしにつかむことをおもはずは、これ大なるあやまり也。しやくそん萬の難行をなされしほとは、つゐに成仏したまはず、六年万事をなけすてゝ、させんして自心を覚てすなはち一心かくなりて一切大衆のためにとかれたることほを、一切経とはいへり。此ゆへにしよきやうは皆仏の覚の一心より出たること也。このゆへに一心はしよきやうのみなりと諸仏のははなりととかれたり。此一心のたゝいませよ人のむねのうちにおいて、六こんのぬしたり。是をさとるとき、一さいのさいこう一せつなにめつすること、水をゆにいるゝかことし。かやうに覺て、自心是ほとけなりと云ことをしるへし。身上もとより明にして、りんしゆもなく、仏衆生のへたてもなしといへとも、まうさうのしむねんにへたてたること、雲の月のひかりをかくすることし。しかれともくふうの力によりて、まうさうのきゆること、風の雲をほらふかことし。まうさうのねんたえぬれば、仏性のこゝろあらはるゝこと雲きえて月の顯るゝかことし。たゝもとのひかりあらはるゝ也。これはしめてほかよりうるに

「(3才)

「(3ウ)

あらず。このゆへに、しやうしりんえのこうをまぬかれんとおもはゝ、たゝしやうしきつくすへし。しやうしきをつくさんとおもはゝ、ししむをさとるへし。自心を覺らむとおもはゝ、させんをすへし。させんはくふうをむねとしてすへし。

くふうと云は、こうあんのごんほんをふかくうたかうへし。こうあむのごんほんは自心を覺たきのそみふかき心をさしともたうしんと云なり。たゝ地こくに墮ことを

ふかくをそるゝを、かしこき人とは云也。たゝ仏たうにこゝろなきは、ちこくのくるしみのかなしかるへきをしらさるる〇へなり。むかしほさつあり、ある女人あるとき一さいのこゑをきく心をみつからくわんして、さとりをえたるゆへに

世尊是をなつけて觀世音ほさつと云也。いまの人もそく心そくふつのをしらむとおもはゝ、たゝいまの物の聲をきく物にあたりて、此こゑをきく物は是なにもものそとふかく見は、すなはちわか身と觀音と別ならずと覺へし。

この身あるともあらず、なしともあらず。一切のさうをはなれて一切のさうをはなれず。念のおこるをはやめむともすへからず。たゝ念はおこりもせよ、やみもせよ、念にはいろはすして、たゝひとへに自心をなんそとうたかふへし。ふかくうたかへと云も、たゝさとらんかためなり。しらぬれ自心をしらむとすれば、心のめくる道たへて、いかむとせられさるるときを、させんとは云なり。さしてもかくのことくにうたかひ、たちあにつけても、ねてもさめても、たゝ自心覺られさることを物おもひとして、そこにとをりてうたかひをくふうとは云なり。くふう一へんになりて、うたかひの心のそ

「(4才)

「(4ウ)

こにとをる時、うたかひにわかによふれて、そくしんそく  
仏の正たいあらはるゝこと、はこやふれてかゝみのかくるゝ所  
なきかことし。十方世かいをてらして、一はう世界に  
あとなし。此ときはじめて六道りんえの道たえて、  
むしのさいしやうをめつす。このとき心中のたのしむことは  
をもつてのへかたし。たとへは、夢のうちに地こくに落ちて  
きわうこくそつにさいなまるゝと見て、くるしみかき  
りなき時、そのゆめにはかにさめて、一切のくるしみも  
のこらさるかことし。生死をもぬくると云なり。かやう  
にさとむ事を人によるへからず。たゝ心ざしによるへし。  
仏と衆生とは水と氷とのことし。こほりにてある  
ほとは、いしかはらのことくにしてさいならす。とけぬ  
れはもとの水にて、えんにしたかひてたゝこほるゝ事  
なし。まよふときは氷りのことし。さとれはもとのめう  
たいなり。こほりの中に水とならさるこほりなし。  
こゝをもつてしるへし。一切の衆生とはもとよりへたて  
なきことを。たゝまよひの一念をへたてとする物也。  
まよひの一念とけぬれば、衆生すなはち仏也。ゆめく  
たいくつの心をおこす事なかるへし。たとひ心ざしあ  
さきは、こんしやうにてさとらすとも、くふうをたしなむ  
ことねんくゝたえずして、心ざしのうちにてりんしうした  
らは、らしいしやうにはかならずむまれなからにさとるへし。けふ  
よりしかけたる事は、つきの日はやすくみちゆくかことし。  
されはとてゆたんあるへきことにはあらず。たゝいまりんし  
ゆのときにならば、何事かようにたつへき、さいこうの身にそ

「(5ウ)

みて地こくとならむをいかゝせん。さいはひにけたつのたい道  
あり。さきのそこはくことは、は枝葉なり。たゝ此一くをむね  
にあてゝたのむにかへりてみるへし。いかなるかこれ自心の仏と  
一切のたいを一めにみんとおもは、たゝわか自心の脉をさとるへ  
し。まことかそらることか、きうにまなごをつけて見よ、いかなる  
かこれ自心の仏、もしよく自心をさとれば、くわちうの中に  
れんけのひらけて、まむこうをふれともしほます。せよ人もと  
よりこのれんけの中にありながら、なにとしてしらさる。自心  
もとよりほとけなり。是を覺をしやうふつといひ、これに  
まよひを衆生と云なり。たゝねてもさめても、たちみにつけ  
ても、自心これなに物ぞと、みつから我念のおこらむみなもと  
につみて見るへし。そもくゝかやうに物にへられおもはれ、この身  
をうこかし、はたらかし、しんたいするぬし、是なにも  
そと、たゝ是をみつからさとらむと心ざして、ふたんに心にひつ  
さけてわするゝことなは、たとひこんしやうにさとらすとも  
たやすく覺らむごとうたかひあるへからず。させんせんとお  
もはんときは、一切のせん悪を一も思はかる事なかれ。又ねん  
のおこるともやめむとすることなかれ。たゝまつすくに  
自心は何ぞとうたかふへし。かやうにふかくうたかう  
とも、しるゝかたなくしていかんともせられるまゝ、心の  
みちたえはてゝ、我身のうちに我といふへき物なく、心  
となつてへきかたなしとする物は、これなに物ぞと、我に  
かへりてよくみれば、なしとしる心もうちうせて、なにのたよ  
りもなき事、こくうのごとくなれとも、こくうごとくなり  
としる所、そこをつくしたへはつる時、自心の外に仏なく、

「(6ウ)

「(5オ)

「(6オ)

ほとけの外に心なきことをさとるへし。此時はしめて

しるへし。みゝにきく所なきとき、是をまことのちやうもん  
なり。めに見る所なき時、三世の諸仏にしやうかんするこ  
とを。たゝし、かやうにこゝろへかきつけたることはのまゝに  
心へておくへからず。たゝみつからさるとるへし。見よく、自心是  
なに物ぞ。

(白紙)

さかの開山の母のもとより念のおこり候を、いかゝしるへき  
と申されければ、

夢窓國師御哥

ふる時はつもらぬさきと吹はらひ風には松の霜おれもなし  
なに事も思ひすてたる身そやすき世をは命のあるにまかせて  
おもへともかなはぬことはねかはれてそむくにやすき世をはいとはす  
いつといふその夕暮にきえはてむ我すむ庵の松風のこゑ  
すてゝみよ野にも山にもいつくにも露の身ひとつおきやかぬると  
あすありとおもふ心にひかされてけふもむなく暮しぬる哉  
露ほとともこゝろ我身にあるならはいつかかなげきの涙かいかむ  
吹ときは中く、雲にたゝよひてよはる風にはなそちりける  
おとろかすかひこそなけれ村雀みゝなれぬればなるこにもぬる  
あはれけにおもひもしらぬこゝろかなすてよとてこそ世はうかるらめ  
身をもみとしらぬ程たに成ぬれはいつくの里も住よかりなり  
まかすれはおもひもたえぬ心かなおさへて世をはずつへかりつる  
身ひとつは山のおくにもありぬへしすまぬ心そおき所なき

佛國師御哥

立ぬまと引ぬ弓にてはなつ矢のあたられてしかもはつれさりけり

返事

土岐伯耆入道

立ぬまとひかぬ弓にてはなつ矢のあたりはつれをいかゝしるへき

夢窓國師

立ぬまと引し弓にてはなつ矢のあたりはつれをしいとみよ

寛仙和尚(8ウ)

弓矢ともさたむればこそめてもみれあたりはつれを何歎くらん

座禪にもし一念をおこり候は、その心のいまたおこり候はぬさきには

いかなる所々と御らん候へく候。又念をやめて無念にならんとおもへは  
あしく候。我にとゝめられて無念になりたるも哀心にて候て、  
なみのうへはしつかなれとも、したは猶こましやかにて候かことく、おほかた  
無念になりたるとおもへとも猶こまかなる妄念にて候なり。たゝ

一念ふしやうなる所にさしむかはせ給候て、又一念しやうせず  
と申す候へはとて、もうくとして物をも分別せざる心にては候  
はす。このこうあんのふかんなる所にさしむかひて候ほとに、  
念のしつまるをもよろこはす、いそかはしきをもなげかす、  
いかにともこゝろへぬところに、しはらくさしむかひて候へは、しねん(9オ)

とふしやうの所をあきらむへく候。たゝこうあむにはかくよ  
りほかいたつらに念をもちあつむることなく、萬心へぬ所  
にさしむきて、なにゝもいろはぬ御身にならせ給候へく候。

たゝ此ねんは、しつまる時もしそかはしき時もひとつにて候。  
こうあんに心をかけて、念のおこりつる所に心をかか

ましく候は、このねんはもとよりうき雲のことくしやう  
たいなき物にて候なり。そうくゝなる時もししやうなく

しつかなる時もししやうなし。たゞいたつらに物をうち  
すてゝ、ししやうふるこくなる所に、さしむかはせたまひ  
候へく候。たとへはくもはさりきたねとも、天は閑に花はさき  
れとも木はもとより候かごとく、妄念の雲はさりきたれ  
ともほんにんはとうせず。妄境の臺はさきちれ共、まな  
こはわつらいなき所にむかはせ給候へく候。

古人云

雲晴てのちのひかりとおもふなよもとより空に有明の月  
まもるとはおもはずなから小山田のいたつらならぬそうつ成けり  
こうあんをもつへき事この哥にてこゝろへ候へく候。

由良長老法語

夢まほろしの身をおしみ、かひなくあすをしらぬ身の、  
法のためにおしみおきて、とこしなへに生死のやみに我と  
まよひて、いつをかきりといふこともなく、ひさしくあきら  
めすして、六種の夢を見たらむことは、まことにおろかな  
るへし。しかれば、しやくそんはくらゐをすて、この法をさ  
とらむは、たまをなけて此所をあきらめしかは雲のうち  
にひちをきりて、このことはりをえたる心さしふかけれ  
は、せつなにあきらむること也。生々世々に寶をおしみ、命  
をおしみて、今生のうたかひのやみはれかたく、このたひ仏法  
にあひ、ちしきにあふとき、いのちをすてゝけにいとなみを  
おこないすんは、やうこう化生のあひた、又かくのことくむな  
しからむ事つゝしむ。やうく座禪の心つかひ大  
かた是にすくへからず。たゞしやうしのかたかひをひか  
くこと道心のあるときとのかはりめ也。此大事をは

「(9ウ)

たみいとなまん心さしのみありて培時掌をかへす  
かごとし。たゞ仏法のみかたきことをなげくへからず。く  
わう劫化生の聞心さしもうすく、道心おこらざることを  
なげくへし。我心なからつたなきかるや、口おしかるや  
いかゝせむ。たれをうらみ誰をかこたん。ねかはくは仏たゝ慈  
悲のたれて我に道心をふかくさつてきたへ。

「(10ウ)

あはれなりとりへの山のやまおくりおくる人としてかへるへきかは  
あすまでといのちをなかくもてはこそ心にたえぬ思ひをはすれ

「(11ウ)

「(10オ)